序　文

私は学生時代から工芸作家になろうと考えていた。理論的なことはさておき、実際に手を使い、頭を使って創作活動をすることに情熱を燃やし歓びとしていた。

しかし人生とは皮肉なもので、卒業と相前後し結婚生活に入り、創作活動からはほど遠い美術工芸関係の会社員として生活をはじめた。丁度一年ほど経ったとき、京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）時代お世話になった佐和隆研学長から、正倉院事務所で人を探しているからと斡旋され、女房からも背中を押され、国家公務員になってしまった。

正倉院事務所の研究職には当時、おおむね古代史や宗教関係の学問を修めてきた研究者が多く、美術や工芸の実技を習得してきた先輩や同僚は一人もいなかった。そんな中で自分に出来る仕事は何かと問う日が続いた。幸い正倉院事務所が抱えていた宝物の調査・研究、保存・管理はすべからく宝物を出来るだけ知ること、出来ることなら理解し尽くすことが何よりも大切であると上司であった松嶋順正先生や関根真隆先輩から教わった。

宝物の状態を知り、宝物の取り扱い方を教わり、宝物に接してきたが、その宝物が何であれ、心を込めて接しないと宝物は黙して語らず、何も教えてくれないことを知った。そんなことをしながら三十数年を費やしたが早や定年を迎え、宝物に向かう機会は無くなった。

この間感じたことは、この千二百数十年間人類は知識を増やし発展してきた、またこの百年間は様々な道具や

技術も手に入れてきたというが、しかし人々の生活・文化は果たして進化・進歩したのだろうかと言うことである。恐らく答えはノーであろうと思う。むしろ私は退化してしまったのではないかと嘆いている。日常的に便利な道具に頼りすぎ、使うべき能力が衰えてしまったのではないかと考えている。古代、なかんずく奈良時代の匠が用いた技術が優れていた理由は何なのか、それは世間でよく使われる言葉があるように、材料をよく知りよく吟味し、適材を適所に、合理的に使い分け、使いこなしていたからにほかならないと考えるのである。そして古代の匠達が使っていた道具や技術は、いま筆者が解き明かしたと思っている以上に高度なものをもっていたに違いないと確信している。

本書に、これまで宝物から教わった幾許かのことをまとめておきたい。

木村法光

目次

序文

第一部　正倉院宝物の保存と管理

第一章　正倉院を守ってきた人々……3
はじめに……3
一　宝庫・宝物の修理……4
二　宝物の調査……8
三　宝物の模造……9
四　正倉院古文書の整理……11
五　宝物の公開……11
六　事件……13

第二章　日本の伝統工芸の源流としての正倉院宝物……16
はじめに……16

一　伝統を見ないもの……17
二　蒔　絵……21
三　技法の復元……22
おわりに……25

第三章　正倉院薬物の保存と管理……28
はじめに……28
一　薬物の容れもの……29
二　現行の保存・管理……36
三　将来に向かって……37

第四章　正倉院楽器の保存と修復……39
はじめに……39
一　献納帳等文書に記載された楽器……40
二　正倉院楽器の調査と修復の歴史……47

第五章　正倉院事務所における復元模造……50
はじめに……50
一　正倉院宝物の模造品作製の歴史……51
二　模造事業の目的とその利用……53

三　模造事業で得た貴重な経験……55
第六章　『壬申検査社寺宝物図集』と正倉院宝物……62
一　壬申の検査……62
二　宝物と照合……63
第七章　正倉院宝物の残材調査……102
はじめに……102
一　面目を新たにした宝物と木簡……103
二　中倉所属の残材と南倉所属の器物残材雑塵中のもの……113
三　古裂整理に際し発見した器物残材中のもの……116

第二部　正倉院宝物の木工・漆工・大刀

第一章　正倉院漆工品の内部構造と施工――X線透視による結果と考察――……123
はじめに……123
一　指物……130
二　曲物……132
三　挽物……144
四　刳物……151
五　漆皮……153

六　乾　漆……156
七　まとめ……156
おわりに……163
第二章　正倉院の木工品にみる接合技法……165
はじめに……165
一　接着接……167
二　釘付け……169
三-A　接　手（板もの）……171
三-B　接　手（角もの）……185
四　その他……195
第三章　正倉院の大刀鞘の素地と木取り……212

第三部　正倉院宝物の家具・調度と技法

第一章　正倉院宝物にみる家具・調度……225
はじめに――正倉院宝物と家具・調度――……225
一　調度品の種類と形式……227
二　使用材料と構造……239

三　多彩な手法……253
第二章　正倉院の愛すべき箱たち……257
はじめに……257
一　木製の箱物……258
二　柳箱と漆皮箱……262
三　葛箱・竹箱（篋）・薦箱……264
四　多彩なるその文様……266
第三章　正倉院宝物にみる文様――技法別にみた場合――……269
はじめに……269
一　技法別にみる文様……270
二　奈良時代の文様の特色……286
第四部　微に入り細に入り――正倉院宝物をめぐって――
第一章　瑇瑁螺鈿八角箱……293
はじめに……293
一　加飾について……294
二　残材と新旧識別図……298
三　構造について……304
おわりに……310

第二章　合　子……311
第三章　漆胡瓶……317
はじめに……317
一　概　説……318
二　技　法……319
第四章　奈良時代の平脱・平文……332
はじめに……332
一　正倉院宝物にみる平脱・平文……333
二　研究史と私注……339
三　考　察……342
おわりに……344
第五章　紫檀木画箱の復元模造……349
はじめに……349
一　正倉院の木画関係資料について……352
二　紫檀木画箱の材料・構造……356
三　紫檀木画箱の復元模造製作……361
おわりに……375

第六章　幢幡鉸具――特に法隆寺系金具について――……382
付　章　宝物調査覚え書き……411
一　螺鈿紫檀琵琶と糸鋸……411
二　白銅剪子の使い途……414
三　末金鏤と蒔絵……416
四　塵芥もまた宝物……418
図版編……423
北　倉
中　倉
南　倉
初出一覧
あとがき
索　引

第一章　正倉院宝物を守ってきた人々

はじめに

正倉院宝物は、献納当初から大切に取り扱われ、保存管理されてきた。しかし、その保存管理の仕方はおのずから違ったものであったことは想像するに難くはない。

献納当初は、その品々はまだまだ真新しくしっかりしていたに違いなく、その宝物個々の由来や工作・構造などのこともよくわかっていたに違いない。千年以上経った近現代とでは宝物の状態や、取り扱い方、保存管理の仕方も大いに違っている。

正倉院宝物のうち舶載品も少なからずあったであろうが、そのほとんどは、当時（八世紀）制作された品々であり、それらは聖武天皇が崩御された天平勝宝八歳（七五六）六月に、東大寺に納められたものが多い。その数年後には北倉から薬物が取り出され人々のために使用されたり、平安時代中頃までは楽器や書籍類も宮中に借り出され利用されたりなどした。

しかしその後千年以上経った江戸末期から明治時代になると、これらの多くは脆弱となり、朽ち、それらを修理をしたり、保存するために人々は努力するようになる。現行の保存管理システムについて、我々の先人がどのようにして築いてきたのか、どのように考え、どのような行動が取られたのか、今我々が継承している路線とは

どのようなものであるのかについて少し見てみたい。

先人とは申せ、奈良時代や平安時代の先人ではなく、近現代に入り国をあげて文化財を守ろうとする気運が高まり、宝物の調査をしたり、保存対策を講じたりされた、特に明治時代の人々の正倉院と正倉院宝物に対する考えを中心に見てみたい。明治時代は、まさに私たちが現在行っている宝物保存管理をどうするか、なぜ、どのようにするのかなど、その考え方の基礎が築かれた大変興味深い大切な時代であったと思料する。

正倉院正倉〔8頁の図1参照〕や宝物の修理・調査、宝物の公開、その他宝物にかかわる出来事等に焦点を当てて考えてみたい。

一　宝庫・宝物の修理

宝庫には、創建以来大小幾多の修理の手は加えられたことと思うが、記録に明白なものは、平安時代の長元四年（一〇三一）のほか十数度におよぶ。[1] 最近では大正二年（一九一三）に全面解体修理が行われた。その前は明治時代で、「明治一〇年六月から同一一年三月まで宝庫修理」（松本包夫作成「正倉院年表」[2]）とあり、その時軒先のつっぱり等を取り払っている。また同一〇年一〇月には、宝庫周辺に初めて避雷針（避雷線）や消防器具（竜吐水や梯子・水桶）が設置されたことは今さらながら感嘆、注目される。

近現代に入り、宝物は校倉造りの宝庫に保存され、大した損壊もなく伝えられてきたと一般に思われているが、実はその永い年月の間にはやはりさまざまな障害があったのは事実である。

木工品は接着面がはずれ、鉄釘が錆びてその部分が鉄錆に置換するなどの傷みが生じ、箱や机などの接合部ははずれ壊れ、絹織物はタンパク質が壊れて粉々になったもの（タンパク質中のアミノ酸は、約八百数十年で分解するという説があるとか）[3]、染みが付き褐色になったもの、縫い糸が切れて破綻したもの、金属である刀剣など

は銹び付いて鞘から抜けなくなったものがたくさんあったと記録されている。[4] 虫損のためボロボロになった経巻もある。さらにまた、人為的要因となるものとしては、盗難に遭いバラバラに壊された鏡がある。

これらの修理事業の黎明期は江戸時代前期にあるといわれる。一方、宝物保存のための長持の製作や寄進はあまり耳にしないが、徳川家康や綱吉らが行った例があり、今もその多くが宝庫に残されている。

また、もっと古いのではないかという例もある。たとえば「破損　三鼓一青子筒　青子瓶一口但口欠」（永久五年＝一一一七、「東大寺綱封蔵見在納物勘検注文」）があり、今いう磁鼓（南倉一一四）と磁瓶（南倉七）は平安時代には破損しており、磁鼓は内側に漆様のものを塗った布を当てて修理されている。しかしいつ修理されたかの記録は残されていない。それは江戸時代前期とはいわず、筆者は破損を発見した平安時代であったのではないかと考えている。その理由は、その接合部の状態からそのように思うのである。つまり破損部はほとんど欠けた部分がなく、無傷であること（破損・接合部がただ一線となっていること）などからそのように考えている。

江戸時代（元禄六年＝一六九三、天保四年＝一八三三）には屏風が手向山八幡宮宮司によって、また染織品も同宮司により手鑑（てかがみ）に仕立てられている。これらも一種の修理であるといえよう。また、鳥毛立女屏風（北倉四四）〔口絵8〕の修理は江戸と明治期の最低二回は行われており、最近では昭和六〇年から六三年（一九八五～八八）三月までの四年間かけて行われた。その時の記録は『正倉院年報』第一二号（平成二年）に詳しい。

明治一〇年（一八七七）、内務省は東京と奈良の両地において宝物修理を行いたいことを上申し許可され、紫檀木画槽琵琶（156 南倉一〇一）〔以下ゴチック数字は図版編の番号を示す〕などの楽器ほか木画関係の宝物十数点が東京へ送付され、内務省博物局で修理された。

正倉院宝物の整理・修理が本格的事業として組織的かつ大々的に始められ、実行されるのは明治二五年からである。この時の記録は宮内庁正倉院事務所編『正倉院御物目録』（大正一三年）に「明治〇年〇月補之」とか、

宝物の修理箇所に直接金書による書き込みがあり、修理された事実や、かなり徹底した修理であったのは知ることができた。そしてこの間の公式修理記録は無くなっているものと私は諦めていたが、近年、東京国立博物館に当時の資料が残されていることを東野治之氏が明らかにされたので、ここに紹介しておく。[5]

その後大正二年（一九一三）、宝庫の全面解体修理が行われるにさいし、宝物は一旦今の西宝庫のあたりにあった仮庫に移され、同三年修復なった宝庫に器物類は返されたが、染織品、特に唐（辛）櫃に納められた古裂類と経巻の修理が奈良帝室博物館や正倉院事務所内で始まり、その後これら古裂類と経巻は仮庫から正倉へ、正倉から西宝庫や東宝庫に移され、その管理が宮内庁正倉院事務所となった現在も、正倉院事務所内に設けられた宝物修理室において五名の職員により連綿と行われているのである。

明治一八年（一八八五）、刀剣をすべて東京へ運び、研磨している（全部で五六口）。この時、刃文まで研ぎ出すのではなく、文字通りの粗研ぎだけであった。刃文まで研ぎ出す修理が行われるのは、その刃の部分を宙に浮かせて保存する正倉院独自の方法が確立した昭和三〇年代になってからのことで、東京から小野光敬親子を招き、正倉院事務所内に設けられた研磨室でのことであった。

明治二五年（一八九二）から行われていた御物整理掛の木内半古回顧文（「正倉院御物修繕の話」）[6]によると、

私は御修理に従いましてからは、決していきなり道具を取ることはいたしません。十分にその当時の工人のものを作る心持ち乃ち其気分を会得したいと心得て、仕事をするよりそういふ方面には常に注意して居りましたのです、きつとこんなものを用いたと思ふ道具の類の研究を先ずいたして居りましてそれゆえ、稲生さんあたりからは常に木内は仕事をしないで困るといふ様な事を言われたものでした。然し是もしばらくの間で、後には掛の方も善く私の気持ちを汲んで下すつて、十分に御物の研究をしながら、安心して御修理に従事することが出来ました。

と懐かしんでおられる。この伝統は、現代においても確実に受け継がれているように思う。

また、正倉院漆工品の修理に長年従事してこられた北村大通氏が、修理時に事務所側と打ち合わせ、常に気をつけておられた信条を修理報告書にまとめられているので、ここに記しておきたい。(7)

①現状維持修理を原則とする。

②長年にわたるカビ痕、泥などの付着物は除去する。

③修理部に古色（こしょく）を付けるなどの粉飾はしない。

④打痕・欠損部で保存上影響ないと思われる一部をそのままに残すよう考慮する。

⑤使用する主材料は、上質日本産漆とするが、彩絵がある場合など漆の使用によって宝物に変色の恐れがある場合は、そのつど充分な研究の上、材料・方法を決定する。

⑥修理に要する特殊材料として麻布・木片・金属（釘・蝶番（ちょうつがい）など）は院蔵塵芥（じんかい）中より適当なものの提供を受ける。

絶対行きすぎた修理はしないように、現状を変えないようにと極力控え目な修理を行うことを目指していた。

（「漆工品修理の記」）

宝物の修理はできるだけ現状を変えないようにという私たちの考えと、その伝統がうまくまとめられていると思う。そしてこれは現在の正倉院での宝物修理の心得でもある。

さらに修理をする前後には、十分な調査と写真撮影や図面作成等のことを怠ってはならず、宝物を保存管理する者と修理施工者との間には、常に絶対的な信頼関係をもつことが最も大切であることは、明治時代の御物整理掛設置以来、大切に受け継がれている。

あとがき

正倉院宝物について書き記した論文を集め一書を編んだ。『正倉院宝物と古代の技』と題したのは、学恩ある米田雄介元正倉院事務所長から頂いた書名である。筆者は同事務所に勤務し、行ってきた仕事は前にも記したが宝物の調査・研究、保存・管理であった。宝物がどのような材料でどのように製作されているかという問題には特に関心があり、調査研究の発表対象は常にそのあたりにあった。ただ、偏った内容ではあるが、その小論があちこちに散在しているため、関心ある研究者や一般読者の便に供することが出来ず、是非一書にまとめるよう恩師から慫慂され、また一般財団法人 仏教美術協会の研究助成金も戴き、思文閣出版の原宏一取締役、大地亜希子氏には大変お世話になり上梓することが可能となった。

本書が成るについては、文中に御名前をあげた方々の他、なお多くの方々からご教示、ご援助をいただいた。この機会を借りて謝意を表したい。

二〇一五年四月

木村法光

ら

羅 60,259,281
螺鈿 19,49,52,57,58,90,109,110,116,117,119,254,256,267,273,293,294,296～299,302,305,310,411,412,420
螺塡 19
籃胎 132,319

り

両面刺繍 283
緑釉 118,277

れ

蓮華唐草文 283,296,411
連珠文 281,286
連点 390,402

ろ

蠟色仕上げ 18,330,344,345
臘型 274
蔦縅 254,283
鑞付け 416
轆轤 34,36,58,136,146,151,251,260,274,286,319,322
鹿角 356

わ

綰物 262
和紙 367,368,371
輪積み 133,136,260,319,324
割板材 313
割楔 190,198,246
割り竹 265

柾目取り　58,127,137,144～146,152,158,180,216,217,219,220,312,322,362
跨枘接　191
末金鏤作　21,416～418,421
繭　61
マルヅケ　→接着芋付
丸面取り　177,190

み

密陀絵　157,160,254,267,273
密陀僧　267
水口細工　264

む

麦漆　94,132,158,298,326
六ツ目編み　242

め

女木　186,187
目釘　193
目絞り法　→鹿の子絞り
目弾き塗り　159
面取り　241

も

木画　5,19,23,24,52,59,113,115～118,166,169,181,271,349～352,354～357,359～361,363,368,369,371,372,374,420
　石畳風木画　169
　甃文木画　59,354,363,369,370
　絵画文木画　255,350,355,356
　幾何文木画　350,355,356,371,377
　木地木画　255,350,355
　紫檀木画　350,351,355,356,363,367,375,377
　象嵌木画　356
　変形矢筈形木画　372
　町形木画　377
　矢筈形木画　59,358,369,371,372
　矢羽根形木画　371
木画界線　307
木材材鑑　127
木栓　195
木竹甲角品　269,270
木彫　110,118
木粉　326
木理　144～148,377
木工(一品、技法)　125,165,166,168～170,227,249,255,258,270,273
モミ(樅)　149,150
紋織物　281

や

焼付塗装　198,326,327,374
焼鈍　374
焼塗料　→焼付塗装
夜光貝　19,411
鏃形(鳥足形)文　277
鑢　367,374
ヤチダモ　356
雇核接　172～174,193
脂　383
矢筈　371
矢筈形　272,368
矢筈文　255,357,358,360,363～368
矢羽根形文　255,272,282,286
山形文　281
山路文　282
鉋　159,377

ゆ

融着　279
釉薬　277

よ

羊毛象嵌　283
寄木　153
寄木細工　355,420
縒り糸　136,138,142,143,145,146,148,152～156
四枚組接　130,179

挽きむら 145
挽物 24,57,139,144,149,156～158,160,162,168,249,259～261,263,264,312,319,322
挽き割り 216
菱形文(菱格子文、菱文／入子菱文) 267,272,281,286
飛鳥文 356
ヒノキ(檜) 149,156,356,377
紐綴結合 195
白檀 356,376
鋲足 403
描画 239,271
屏風骨組 186,189
表面塗装 163
平文 17,18,21,254,255,273,329,330,332,333,336,340～345,417,418
平編文 267
平打付接 175～177,246
平織 281
平組織 393
平留接 182,183,187,192
平枘接 178,188,189
平蒔絵 343
平丸頭鉄釘 170,187
檳榔 356

ふ

V字形文 277
フェルト(―加工、フェルティング) 244,282,283
拭漆 20,160,327,373
吹絵 105,106
輻射孔材 127
不整十字文 277
伏せ彩色 58,273
蓋掛り 308,312,350
二股足釘 198
筆 59,278
ブナコ細工 24,139
振り留め →留形
規 135,140,313

へ

平脱 17,18,21,57,71,81,89,254～256,267,273,328～330,332,333,335,336,340～345,417,418
平脱文 329,339
ベタヅケ →接着芋付
鼈甲 273,293
ベトナム式糸鋸 412,413
辺縁扣接 171

ほ

放射状縞文様 277
紡錘形釘 172,198
紡錘形鉄釘 172,305
防染 254,283,284
宝相華文 411
法隆寺系金具 382,405
法隆寺献納宝物 383,384
墨線 255,369
枘(男木) 126,131,132,174,178～180,184～188,190,191,193～195,197,246
枘孔 131,132,170,173,174,178,188,189,191,193,194,242,246
枘組 249
枘先 197,246,251
枘接 168,172,173,188,189,193,198,246
枘継 193
ボルト金具 195
本核接 171,174

ま

巻上げ 132～134,319,324
蒔絵 16,21,48,59,238,273,416～418
巻き貝 411
巻き素地 323
曲木 139
曲物 24,132,135～137,139,140,143,144,156,157,160,162,167,176,195,196,235,259,263,312,319
柾目 135,144,157

魚々子文　255,286
生留め　182
生麩のり　367
鞣し　55

に

膠　132,158,200,298,367
膠彩色　255,273
二間組　282
二彩　118
錦　60,111,262,281,393
二重絞　284
二重枘　242
二重枘接(二段枘接)　188,191
二条軸一間組　282
二色絞　284
煮染め　58
二方胴付枘　189,191,242,239,246
二枚組接　88,179
二枚矧合　172,357

ぬ

緯糸　136
貫通し　242,245,247
布　134,146,154～156,326
布着せ　23,58,126,131,137,139,140,142～147,150,152～156,159,160,162,163,183,214,218,250,260,263,312,314,322,326
布目　126,154
塗立て(立て)　306,327,330,339,344
塗花塗り　326～328

ね

根朱筆　59
捻り編み　243
ネズコ(鼠子)　149
練り描き法　417
練り鉢　159
年輪密度　147

の

鋸　374
乗掛け枘　→枘
糊付け　175,200

は

刃　415
掃墨　327
葉形裁文　390
接ぎ合わせ　139,157,216,240
矧合　168,171,172,305,306
剝ぎ起こし　18,339,340,342
矧手　166,167
剝ぎ取り　255,328～330,332,339,344
白及　159,200,298
白斑文　156
白釉　277
曝涼　36
刷毛目塗り　306
箱金物　195
箱組　248,249,259,357
箱根細工　355
鋏　412,415
端喰(嵌)接　184
撥鏤　23,52,54,58,260
端栓　→込栓
針描き　89,405
針金　109,390
貼り付け平文　341,345
版型防染法　254
版木　283
ハンダ付け　416
斑竹　56
斑竹文　272
半留接　→留形
半丸鑿　400
斑文　156,255

ひ

皮革品　273
挽き回し鋸　412

つ

鎚起 277
突合せ 169,170
突付け接ぎ 131,157,158
接手 167,171,185
継手 193～195
ツゲ(黄楊木) 356～360,363,366～370,372,373,376,377
黄楊木薄板 369,370
付印籠 168,308
土塗料 328
鎚目痕 252
包打付接 175～177,187,249
包込枘挿 171
綴れ織り 285
蔓草文 272

て

鉄 259,327
鉄挟子 116
鉄釘 157,158,169,170,172,175,176,184,194,198,199,242,248,307,357,362,374
鉄製足 406
鉄線 413
鉄鍛造 252
鉄板 413
出枘 171
点刻 405

と

砥石 364
唐花文 281,411
道管 151
陶器 269,277
刀痕 362
胴摺り 344
銅線 414
陶胎 319
胴貫 246
胴付き鋸 367,374
胴付枘 178
籐蔓 413
籐の弓 413
籐張り 242
動物文 288
胴巻き 137
灯明台 416
通し縫い 186
通枘 178,188,246
研ぎ出し 18,255,273,330,332,339～342,344,418
研出蒔絵 21,343,344,417
鍍金 274,275,397,416
塗漆 123,133,152
把手 109
トドマツ(椴松) 149
砥粉 327,328
留形(留接) 143,167,177,182～184,192,363,394
大留め 192
真留め 192
振り留め 182
留形隠蟻組接 183
留形隠組接 60,183
留形隠三枚組接 182,183
留形隠七枚組接 182,183
留形隠二枚組接 182,183
留形包打付接(半留接) 175,177,192
留形包三枚組接 185,187,242,249
留端喰接 184
止め枘 157,178,188,189
鳥草 284
鳥文 272
塗料 171,279
ドロノキ(泥の木／白楊) 149

な

中砥 364
中塗り 255,327,328
中塗漆 328
長枘 190
魚子鏨 275

せ

赤漆　105,248,254,255,326,327
赤漆塗り　30,248,264
舌　373
接合(―技法)　151,158～160,163,165～169, 173～176, 181～183, 185～189, 191,192,194,241～243,247～249,305, 326
接合金具　167
接着芋付け　168,171
接着固定　324
接着剤　73,126,132,133,157,158,163, 167～169,171,176,177,179,181,183, 184,186,192～194,197,200,259,261, 298,363
栓　194
氈　282
繊維　326
剪子　414～416
染織(―品)　6,254,267,269,280,283
染色　56,60,239,240,254,267,283,284
旋盤加工　286
線彫り　255,296,329,387,390
染料　267,272,279,284

そ

象　283
惣型　274
草花文　283
象嵌　168,277
雑巾刺し　285
象牙　23,356,358～360,363,364,366, 368,377,378
装飾技法　253～255,329,411
装飾文様　345
添木　366,368
副木　369
削(殺)接ぎ　152
壜　341,343
壜塗　326,328
側板　369
底板心木　377
側花形裁文　390
押糊　200

た

胎　132,155,157,326
台鉋　59,159,313,367,374,377
台木　368,369
太鼓張構造　176
タイ式糸鋸　412～414
大豆糊　200
瑇瑁　58,73,74,110,114,115,119,255, 293,294,296,298,299,302,305,310, 420
鏨　275,398,413
タガヤサン(鉄刀木)　356
拓本　62,63
タケ(竹)　132,265,272,356,413
竹釘　172,173
畳摺　171,360,371,372
立上り　140,168,308,373
裁鋏　415
脱乾漆　325
経糸　136
経錦　393,396,401
縦挽き　146,147
縦挽き材　150,158
縦挽き鋸　59
太枘　139,170,174
太枘接　171
玉縁　77
段欠き　179,185
鍛造　252,274,275

ち

竹工品　272
縮絹　394
鋳造　36,252,274,277
彫金　274
彫刻　269
彫漆　343
長斑錦　281

し

地　22,58,325,327
地色　284
ジカヅケ　→接着芋付
仕切り　244
仕口技法　166,175,186,259
四間組　282
地獄枘接　188,191
地粉　324,327,328
獅子使い文　281
刺繍　267
刺繍文　283
地摺　188
自然釉　34
下地　22,58,60,126,133,145,155,156,159,160,163,263,314,324,325,328
下地漆　133
シタン(紫檀)　356,363,369,374,376～378,411
紫檀地　181,360
七枚組接　179,249
漆工芸(一品、技法)　125,163,254,267,269,273,328,332,344,417
湿拓　62
漆皮　22,52,90,134,160,253,264,325
七宝　256
刺納　285
四弁形釘　170
四弁形金銅鋲　175
四弁花形文　272
四方胴付枘　189,190,241,246
四方柾　131,132
しぼうるし(絞漆)　326
しぼりうるし(絞漆)　326
縞文様　281
紗　281
赤銅　311
しゃくり　60,245
秋材部　127,131,146
十字相欠接　185,186
朱漆　254
樹下対獣文　281
縮絨加工　244,282
樹脂　19
樹種　156
朱塗り　152
狩猟文　275,281
春慶漆　159
春材部　127,144,150
小花卉文　→花卉文
小墨斗　109
燭剪　415
蜀江錦　401
白木造り　247
芯切り鋏　415,416
浸染　284
真留め　→留形
心棒　109
心葉形裁文　391
針葉樹材　127,130,131,137,145,147,149～151,156,377

す

水晶　58
水晶伏彩色　57
須恵器　34,277
蘇芳染め　32,119,241,254
透かし　369,387
透かし彫り　255,275
スギ(杉)　149,150,357
透き漆　328
錫　356～358,360,361,363,364,367,368,376,377
鈴　406
錫薄板　360,375
雀文　296
隅相欠接　185
隅打付接　175,176,183
墨塗り　327
墨塗料　328
摺漆　327,344
摺絵(摺染)　284

黒漆釘　105
黒漆研ぎ出し　339
黒漆塗り　32,82,110,152,161,247,248,250,312,314
クロガキ(黒柿)　356,358～360,363,366～368,377
クワ(桑)　356

け

磬形裁文　390
傾斜通枘接　188,190
袈裟襷文　286
化粧貼り　307
削り台　374
仮瑇瑁　114,255
仮斑竹　20,272
毛彫り　57,97,256,332,340,416
毛彫甎　275
ケヤキ(欅)　156,356,357,362
蹴彫り　255,329
巻胎　24,158,249,250,260～262,312,319,321～323
研磨　6,418
圏文　286

こ

小石丸　61
コイル巻き　24,134,136,260
笄　173,198
甲角品　273
紅木紫檀　356,371,375
纐纈　283,284
格子文　277,286
　斜格子文　273,282,286
膠着　358,360,365
光背　401
甲盛円形釘　170
コウヤマキ(高野槇)　149
広葉樹材　127,130,144,146,149～152,156,357
刻苧(木屎)　326
刻苧飼い　135,137,140,163,313,326
黒檀　356
木口取り　146,158
琥珀　58,295,297
小針　173
五弁形銀製鋲　175
五枚組接　179
込型　274
込栓　170,173,194,197,198,246
ゴム型　371
小麦粉　159
転び　190
金銅　115～118,259,311,399,402,403,405,406,420
金銅飾釘　267
金銅星形鋲　170

さ

彩絵　111,113,131,152,267,274,284
犀角　315
彩色　58,110
刺し金　404
刺し縫い　283
指物　130,156,157,160,167,259,260
鑠子　227,258
核　174
核(杏仁)形釘　170
佐波理　311
錆　22,58,325,327
佐目塗り　326～328
鞘上末金鏤作　→末金鏤作
沢栗　356
サワラ　149
山岳文　283
三纈　283
三間組　282
散孔材　127,130,151,156
三方胴付枘　189
三方胴付枘組　239
三枚組接　88,179,249,357,362
三枚矧合　172

顔料 152,267,272,279

き

生糸 61
生漆 22,32,254,264,328,373
幾何学文 255,267,281,286,350
木釘 158,172,173,176,189,196,239,259,262
素地(―加工、―構造) 124,126,159,163,249,326,357
素地痩せ 159
素地割れ 322
木地象嵌 19
器胎構造 137,151,156
亀甲文 271,275,286
木取り 147,150,152,157,158,212,214～220,362
絹糸 61,109
糅漆 326
夾纈 254,283
夾紵 341,343
鋸歯 412,413
鋸歯状文 277
鋸断 367,369
キリ(桐) 149,156,356,364
切り透かし 168,275,387,414
裂 394,396
金 356
金絵 115
金糸 420
金胎 319
金泥(―絵) 22,145
金鍍金 255,399,400,405,416
金箔(―押し) 73,111,255,258
金薄押 117
金平脱 57,58,118
銀 109,311
銀糸 420
銀製釘 298
銀線 414
銀台鍍金 417
銀鍛造 252
銀泥絵 146
銀貼り 256
銀鋲 298
銀覆輪 298,299
銀平脱 90,318,322
銀蒔絵 89
金銀絵 114～117,119,254,274
金銀泥(―絵) 59,254,267,420
金銀箔 110
金銀平脱 117
緊結 195
金工(―品) 267,269,274
金属圧延機 364
キンマ(漆器) 134

く

釘 87,105,126,131,167,169～171,173,175,176,179,181,227,258,259
釘頭 176
釘孔 110
釘付け 130,143,151,157,167～169,171,175,183,184,192,198,248,357,378
茎文様 411
矩形相欠接 185
矩形三枚組接 185,187
楔 197,251
鎖付け 402
組合わせ接 179
組接 157
組手(―接) 126,130,157,167,171,178～181,185,186,192,242,243,249,259
組手仕口 166,179
組紐 54,77,82,281,282,286
組枘仕口 166
蜘蛛手断文 155
刳形 369
刳物 24,151,153,156,159,160,168,235,259,262,312
屈輪文風文様 403
黒漆 113,114,254,306,315,326,327

漆焼き付け　→焼付塗装
上塗り　255,327,328
上塗漆　327,328
繧繝彩色　267,272,282
雲文　296

え

H 形接合　323
L 型金具　187,242

お

追入れ接　→大入れ接
追掛継　194
追廻継　193,194
黄銅　311
黄釉　118,277
大入れ(―接)　175,178,188,189,246,247,249,357,363
大釘　170
大留め　→留形
大面取り　357,362
雄型　137,325
男木　→枘
鴛鴦文　296
押縁　86,88,131,171,176
緒止め　190
織物　60,280,281,286
折れ釘　170,198

か

絵画文　267,272
貝の口　178
花卉文　283,296,356,420
角釘　170,198
角組　282
隠楔枘接　191
隠三枚組接　249
角柱釘　171
角鉄釘　187,242
角頭鉄釘　242
角部材　188
陰漆　326,327
鹿毛漆　326,327
蔭切　248
懸子掛り　131
重継　193,194
かしめ付け　198,396,403
堅地　328
片胴付枘　189
カツラ(桂)　152,157
角面取　190
金具　197,198
金槌　413
鉄床　413
金輪接(金輪継)　194
金折り金具　187,242
鹿の子絞り　284
鹿の子斑文　277
樺皮　158
樺皮縫合　195
被せ蓋造り　137,139,157
被せ面枘接　188,190
花弁文　277
鎌倉彫り　343
框組　185～187,189,192
花文　272
唐木細工　351
唐草文　255,281,296
からくり(絡繰)　236
ガラス　269,278
仮貼り　371
カリン(花櫚)　356,357,359,360,363,366,376
皮(猪、牛、鹿)　156
皮(鹿・馬等)着せ　214
皮製素地　52,134
革紐結着　196
変塗り　159
環孔材　127,145,146
乾漆　118,134,156,159,161
乾燥炉　58
乾拓　62
鉋　312,325,364,367,369
鉋屑　59

【技法・道具】

あ

相欠(―組、―接) 171,174,179,186,239,248,249,357
合釘(―接) 172～174,183,305,306
合口掛り 173,174,181
青貝細工 411
阿膠 158,200
アケビ 17,264,265
麻糸 324
麻布(―貼り) 239
絁 52,60,61,105,262,393,394,401
網代編み 132,134,265
網代編文 267
アスファルト 19
当り欠き接 185,186,196
油抜き 56
油焼き 374
網目文 272
編物 262
綾 60,281,393,394,396
粗研ぎ 6
粗布 146
荒彫り 326
蟻形三枚組接 180,181
蟻組(―接) 179～181,183,249,259
蟻仕掛 180
蟻枘 180

い

いかけ 81
石塊 377
石畳(―組、―接) 157,180
甃／石畳(菱形)文 255,271,307,357～360,363,364,366～368
鋳出し 403
板締め染め 284
板幅矧 169
板目(―取り) 57,144,145,157,158,217
一番取り膠 374
一枚矧合 172
市松文 272,286,307
一間組 282
糸 54,392
糸鋸 297,411～414
糸巻車 109
糸柾 131,142
芋接 184,357
芋付け 131,139,157,158,362
入子菱文 267,272,394
入れ底 175,176,357
色糸 281
色漆喰 349
陰刻 254
印捺防染 283
印籠蓋(―形式、―造り) 135,157,158,308,322,373

う

薄板(―張り) 157,367,369
渦巻文 267
内組接合法 183
内刳り 216,219,262
内敷き 268
打ち抜き装置 398
内張り 268
内貼り 372
打付接 175,192
馬乗り枘 190
裏彩色 →伏せ彩色
漆 105,113,117,168,318,326～328,340
漆絵 77
漆液 325,418
漆液濾過精製 326
漆濾し紙 326
漆下地 22,250,325～329
漆塗膜 126,140,142,155,156,159,255,256,329,330,344
漆塗り 171,235,238,262,263,318,322

新村撰吉　22,263
末永雅雄　200
杉孫七郎　62,384
鈴木治　196
関根真隆
64,80,161,200,221,234,248,346,410

た行

高田良信　410
髙橋隆博　15
田川真千子　21,27,421
竹内碧外　200,351
田中芳男　408
辻村松華　18,339,340,342
寺田晃　318
東野治之　6,15
徳川家康　5
徳川綱吉　5
得納良介　383
鳥井武平　11

な行

中川正人　315,324,330
中里壽克　310
永嶋正春　61,164
中野政樹　382
中村幸作　378
中村武郎　378
成瀬正和　25,252,256,315
蜷川式胤　8,62,64

は行

原田治郎　14
広瀬都巽　18,341
福山敏男　410
藤野雲平　20
藤原鎌足　315
冬木偉沙夫　159
穂井田忠友　11,102

ま行

増村紀一郎　22
町田久成
8,62,67,383,385,386,393,408
松尾良樹　19,23,346
松嶋順正　14,64,80,86,98,99,103,180,
294,310,407
松田権六　18,149,159,164,330,341
松本包夫　4,243,244,282,383,407
松本楢重　407
水上康子　346
溝口三郎　18
三宅也来　213
村田源　26
森鷗外　12,48
森川杜園　8,9
森豊　269

や行

山中五郎　101,163
横山松三郎　8
吉田文之　23
吉田包春　52
吉田立斎　23,52
吉野富雄　18,340～342,346
吉松茂信　254,283
米田雄介　61,256,316

ら・わ行

李宗硯　313,323
六角紫水　18,340
和田軍一　15,148

索　　引

【人　名】

あ行

赤地友哉　139
浅井和春　410
安達直哉　101
荒川浩和　134,330,342,346
石田幹之助　414
石田茂作　148,384,407
伊藤博文　12,383
稲生真履　10,51
植村久道　11
宇賀神米蔵　378
内田正雄　8,62
恵美押勝（藤原仲麻呂）　416
王世襄　27,328
大賀一郎　213
大久保利通　13
大坂弘道　24,27,351,378
大野玄妙　410
大野正　214
大場松魚　21
岡田章雄　150
岡田譲　18,27,124,330,341,349
小川松民　9,51
奥村秀雄　15,383,410
尾崎元春　219
小野光敬　6
小野善太郎　18,339

か行

覚如上人　230
加島進　221
樫山和民　15
神立三之助　18,26
亀田孜　148
木内省古　52
木内武男　10,200,378
木内半古　6
義慈王　315
岸熊吉　180
岸光景　8
貴島恒夫　164
北村久斎　52
北村昭斎　314,413
北村大通　7,58,156,330
キヨッソーネ　14
九鬼隆一　384
黒川真頼　9,18,63,339,384
好地伸　64,80
小林行雄　26

さ行

阪田宗彦　410
坂本曲斎　200
佐藤庄五郎　200
澤田吾一　318
澤田むつ代　396,410
嶋倉巳三郎　26,164,221,356
城倉可成　139
新海治　134,135
進士慶幹　150
沈明姫　25

◎著者略歴◎

木 村 法 光（きむら・のりみつ）

1939年　滋賀県に生まれる
1966年　京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）　美術学部工芸科卒業
1967年　宮内庁正倉院事務所保存課勤務（総理府技官）
2000～11年　文化庁文化財保護審議会専門委員
2001～05年　京都市立芸術大学教授
2004年～　福岡県文化財保護審議会専門委員
2005年～　奈良国立博物館客員研究員
2012～14年　佐賀大学非常勤講師

〔主な著書〕
『正倉院の調度』（編著　『日本の美術』294　至文堂　1990）
『正倉院宝物にみる家具・調度』（編著　紫紅社　1992）
『正倉院美術館 ザ・ベストコレクション』（米田雄介・杉本一樹編　共同執筆　講談社　2009）

正倉院宝物と古代の技（しょうそういんほうもつ　こだい　わざ）

2015（平成27）年6月13日発行

定価：本体15,000円（税別）

著　者　木 村 法 光
発行者　田 中　　大
発行所　株式会社　思文閣出版
〒605－0089　京都市東山区元町355
電話 075－751－1781（代表）

印　刷
製　本　亜細亜印刷株式会社

©N. Kimura 2015
ISBN978-4-7842-1809-7　C3072